

日本の女性作家が描くふたごたち

文学作品を批評するときによくいわれることの一つに、人物が描かれているとか描かれていないとかがあります。主人公を始めとする登場人物がどう表現されているかが、筋の展開と並んで作品の魅力を左右するわけです。ですから、作家によっては自分は女性を描くことが苦手だと宣言して余り女性を登場させない人がいたり(たとえば、吉村昭)、女性のなまめかしい姿態の描写に関しては天才的な人もいます(たとえば、吉行淳之介)。

では、少年を描くとなるとどうでしょうか?男性作家が少年を生き生きと描いたり、その魔術的な美しさを際立たせることはよくあります。僕の専門のドイツ文学でもカロッサ、ヘッセ、トーマス・マンなど青春を扱ったスタンダードな作品群を挙げることができます。でも、女性作家による少年ものでは?思いつくところでは、今やミステリー界のスターダムに登り詰めた感のある宮部みゆきでしょうか?彼女は、現代の作家の中でも少年を描かせたらピカイチの存在です。そして、その少年たちは、やはりふたごが登場する『ステップファーザー・ステップ』だろうと、『蒲生邸事件』や『淋しい狩人』だろうと、精神的な清潔感と人間的な素直さの点で何とすばらしい人物像に仕上がっていることでしょう。

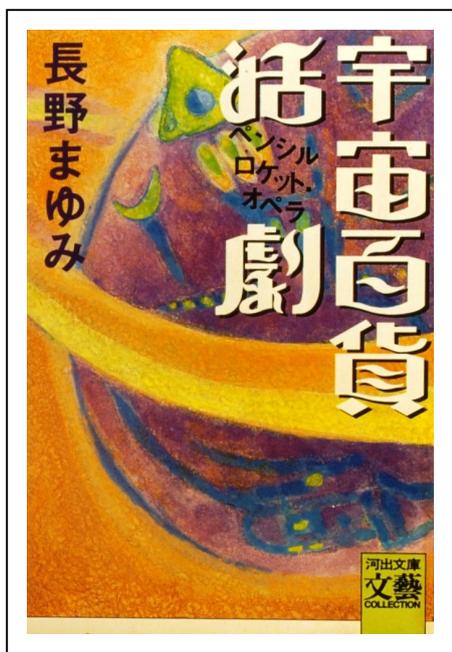
さて、今日紹介する作品はその宮部みゆきに負けずとも劣らぬ素敵少年像を提示している長野まゆみの『宇宙百貨活劇(ペンシルロケット・オペラ)』です。面白いタイトルでしょう?「ペンシルロケット」とは、ちょっとかわいらしい感じで、ペンシルチョコレートを思い起こさせるファンタジーに満ちたことばです。鉛筆が実際ロケットになって教室から飛び出したりしたら楽しいですからね。でも、これは実在の日本の宇宙開発の幕開けとなった超小型ロケットの名前なのです。本当にちゃちと言っているほどの、花火に毛の生えた程度のロケットだったのですが、僕が小さい子どもの頃、理科少年たちに夢を与えたものでした。もっとも僕は、大好きだった理科の道には進まずに文学に迷い込んでしまいました。

ミケシュとロビンは、雨の降る日退屈すると、依頼人となって架空の捜し物を頼むために探偵である父親の事務所に現れたりする楽しいヤツラです。この二人が三日間も続くケンカになったのは、どちらが兄でどちらが弟かということでした。二人とも本当はどちらでもいいのに、自分の方が兄だと張り合ってしまったのです。父母もどちらが先に生まれたのか分からないので(!)、ケンカに終止符が打てないどころか、自分たちでもケンカになり、兄弟の仲もますますこじれます。しかし、三日目の「月の祭り」の夜、二人は同じ広場に行くのです。だって、二人はツインだから。「ミケシュ、ぼくたちはふたごで、兄弟なんかじゃないんだ。ふたごはふたごでしかないんだよ」と二人は仲直りしますが、両親の方のケンカはそのあと一週間も続きます。では、どうやって夫婦喧嘩は止んだのでしょうか。それは、「ママ」の「産んだのは、兄弟ではなくふたごだった」という証言によってでした。「ぼくたちはふたごで、兄弟なんかじゃないんだ」、「産んだのは、兄弟ではなくふたごだった」。10回も繰り返し声に出して読んでしまいました。

ところで、この作品には身長争いがあったり、違いを出したいがために本当は同じ味のソーダが好きなのに相手と違う味のソーダをわざと選んだり、「ママ」の誕生プレゼントを別々にしようとしたり、ふたごが自己を成長させる過程も描かれています。また、同級生に間違えられたりといった、ふたごによくある出来事も書き込まれています。さらに、クリスマスやカーニバルのような四季の色々な行事を巡ってのふたご間、家族間の交流が優しい筆遣いで綴られていきます。その中で、この二人の性格の違い

が浮かび上がってくる様は見事としか言いようがありません。

『宇宙百貨活劇』は、プラネト・ファンタジーらしいエピソードが満載の、どこから読んでも不思議で楽しい世界へ侵入することのできる作品です。男の子のふたごをお持ちのご両親、男の子のふたご自身に心から推薦したいと思います。否、文庫はよく品切れや廃版になってしまいますから、僕なら、たとえ子どもたちが読むのが15年後、20年後であっても、今すぐ本屋に走って一冊確保するほど素敵に一冊です。



長野まゆみ：『宇宙百貨活劇(ペンシルロケット・オペラ)』書影

長野まゆみ：『宇宙百貨活劇(ペンシルロケット・オペラ)』河出文庫。

宮部みゆき：『ステップファーザー・ステップ』講談社文庫。

『淋しい狩人』新潮文庫。

『蒲生邸事件』文春文庫。

『ツインズ』40号（ビネバル出版）から転載・修正